

Courrier de Séverac

セヴラック通信



第7号

2009
後期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

2009年12月13日(日)
代官山エナスタジオ

《例会》

15:00-16:40

【演奏】

ヤンネ館野 (Vn) ・ 平原あゆみ (Pf)

石田一郎：ヴァイオリン・ソナタ第2番

～休憩～

【演奏とお話】

末吉保雄

セヴラック：歌劇《風車の心》について その2

鎌田直純 (Bar) ・ 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：歌劇《風車の心》第1幕第2場より

Deodat de Séverac : Extrait de "Le coeur du Moulin" Acte 1, Scène 2, Poème de M. Magare

【演奏】

館野 泉 (Pf)

パブロ・エスカンデ《ディヴェルティメント》

Pablo Escandé : Divertimento

第1楽章 プレリユード

第2楽章 テーマとヴァリエーション

“セファルディム” (ユダヤ・スペイン系の古い歌)

第3楽章 アダージョ

第4楽章 ダンス

《懇親会》

17:00～

セヴラック通信

Courrier de Séverac

第7号

2009
後期

目次

歌劇《風車の心》について(1) ●末吉保雄	02
歌劇《風車の心》初演のキャスト一覧	06
歌劇《風車の心》曲目一覧	07
石田一郎のプロフィール	08
〈連載〉セヴラックを伝えた日本語文献 その4 ●末永理恵子(文)	09
〈連載〉セヴラックと私 ●西村祐	14
第12回例会の報告 ●鎌田和夫	16
第13回例会プログラム	表2
NEWS	表3
編集後記	表3

オペラ 歌劇《風車の心》について（1）

第12回例会の講演より

末吉保雄

◆風車と粉ひき男

今日はプログラムに風車小屋の写真（前回の会報の写真を下方に再掲載）を入れていただきました。これをじっと眺めていますとセヴラックの音が聞こえてくるような気がいたします。この写真はドーデの風車小屋ですが、私もずいぶん昔に行ったことがあります。

これからお話しする歌劇《風車の心》の主人公は、「風車」です。風車というのは、風を受けるために少し高いところにあります。いつも風が来るような丘の上や、周りの樹が邪魔をしない裸山にあつて、たいてい村のはずれに位置します。ただし地方によって風の向きや力が違うので、風車の場所やかたちも多少違います。

風車は、風力で風車を回して臼をまわし粉をひく、つまり粉ひきのための仕掛けです。フランス語で moulin ムーラン、英語で mill ミルです。moulin には、粉ひきという意味もありますし、粉をひくことや粉ひき男、という意味もあります。そこで、会報（セヴラック通信第6号）にある、ブランシュ・セルヴァによるセヴラックの作品表（柿沼太郎訳？）には、「粉屋の心」と訳されているのです。

この風車小屋の中には、粉ひき男がいます。常にいるわけではありませんが、番をしています。風車をめぐっては、いろいろなお話があり、有名なドーデの『アルルの女』はこういう情景の中のお話ですし、シャンソンの中にも「私の心の風車 "Les moulins de mon coeur"」という有名な曲があります。

ここは大事なことですが、風車というのはまわっていますし、粉をひく機械もまわっていますから、音がします。風がなくなっても、大きな羽根がついているので、空気が羽根を通り過ぎていく音が聞こえます。風の具合によって聴こえてくる音の様子が違いますし、年中なか音がかかっている。その風車から聴こえてくる「音」というのが、このオペラのひとつの鍵になっていることが台本からうかがえます（これを舞台でどのように演出しているかは別の話です）。



ドーデの風車小屋



サン＝フェリクス・ロラゲの見晴台

セヴラックが舞台に選んだのは、サン＝フェリクスサン＝フェリクスの村にあったと思われる想像上の風車でした（実は彼自身に、このオペラの展開と似たような話があったようですが、まだ調べが進んでいないので、どの程度実話なのか不明です）。サン＝フェリクスサン＝フェリクスの想像上の風車小屋の横には、鉱石を採った後の坑道の深い穴が開いています。その穴から風が吹き込んできて、風車の音と重なって、過去からの声聞こえたりします。このオペラではフクロウも大事な役割をしていて、夜、風車小屋に行くと、フクロウの鳴き声と後方から吹き荒れてくる風の音と、風車を吹きすぎていく風の音とが、イメージ上で複雑にからみあい、登場する人物たちの運命をもてあそんでいます。

◆《ペレアスとメリザンド》の影響

この台本を書いたモーリス・マアグル Maurice Magre は、モーリス・メーテルリンク Maurice Maeterlinck の系譜にある作家と思われます。メーテルリンクはベルギーの人で、象徴的で神秘的なテーマと、クロード・ドビュッシー Claude Debussy が作曲した《ペレアスとメリザンド Pelléas et Mélisande》によって、その戯曲そのものよりもよく知られています。《ペレアスとメリザンド》は、ガブリエル・フォーレ Gabriel Fauré やアーノルド・シェーンベルク Arnold Schönberg も音楽を書き、19世紀末から20世紀初頭にかけて多くの芸術家にインスピレーションやイマジネーションを与えた非常に重要な作品で、そのテーマは、人間を非常に大きく動かしていく、見えない運命の力、というものでした。

物語は、長らく不在だった男が帰ってきて、この男をめぐる女性との葛藤が始まり、運命をもてあそばれて、愛が悲劇で終わるというものです。人間が運命や時間の中で作るものを象徴的に描く、というのがメーテルリンクの《ペレアス》のテーマです。

歌劇《風車の心》は1909年12月8日にオペラ・コミック座で初演され、翌1910年にわたって合計14回の公演が行われています。セヴラックがこの台本を知ったのは1901年ですから、1901年から1909年にかけて作曲されたというべきです。セヴラックがなぜモーリス・マアグルのお話お話に心惹かれたのかはわかりません。1902年というのは、ドビュッシーの《ペレアスとメリザンド》が初演された、現代の音楽史を知る上で非常に重要な年です。戯曲はそれに先立ってパリで上演され、たまたま観にいったドビュッシーが大変感動し、ぜひオペラにしたいということから、オペラ化が始まっています。したがってメーテルリンクの作品は、パリの先進的な芸術家の多くの注目するところであったわけです。また当時のベルギーのブリュッセルやブルージュ、ヘント（フランス語でガン）の人たちの文学的な動きというものは非常に当時の新しい動き（メーテルリンクはヘントの出身）で、パリからもむしろ学ぼうという動きがあったくらいです。特にあの偉大なマラルメがベルギーに足を運び、いろいろな作家たちを育てていました。

この作家モーリス・マアグルはおそらくその流れを汲んだ人だと思われます。この《風車の心》の物語も《ペレアス》と非常によく似たテーマなのです。そしてセヴラックの念頭にもドビュッシーやメリザンドの《ペレアス》が強くあったと思われます。

◆《風車の心》誕生の経緯

2008年に来日されたジャン・ジャック・クバイネさんは、セヴラックの手紙のコレクターでしたが、セヴラックの書簡をみると、このオペラが成立していく事情がよく説明されているようです。

セヴラックは1901年にこのテキストを知って、たいそう感心して、すぐオペラに取りかかります。セヴラックが、パリのスコラ・カントルムに勉強に行っていた時代です。音楽を少しずつ作曲していきませんが、テキスト自体がもうひとつ足りないように思われ、話を少し増やしたいということをやアグルと手紙のやりとりをしています。最初は1幕だけの短い話でしたが第2幕が望まれ、さらにオリジナリティといえる新しい発見を盛り込みたいというセヴラックの強い要望を受けて、台本が少しずつ書き直されていきます。

1903年、パリ市は、アルベール・カレ Albert Carré という、《ペレアス》をオペラ・コミック座で紹介した支配人に依頼して、若い作曲家たちを激励するための、一種のオペラ・オーディションを開催します。これは作曲たちの未完の作品や、作曲途中の作品を、部分的でよいので楽譜を提出させ、試演し面白そうなら、作曲を書き続けてもらい完成したら演奏する、というものです。ロンドンでは今でも開催され若い人たちに大変勇気を与えるよい伝統となっています。セヴラックのオペラは、このオーディションを通過しましたが、1904年になっても1905年になっても上演は実現せずに延期されます。

1907年、モーリス・ラヴェルが歌劇《スペインの時》を作曲しました。このオペラにふんだんに表れるスペイン情緒やスペイン音楽の魅力を知ったアルベール・カレは、セヴラックにも、南仏ラングドックの色彩を強めてほしい、と要求し、当初予定していた以上に、村人たちの踊りなどのシーンが盛り込まれることになりました。

結局1909年の12月のシーズンに上演することがようやくその1年前に決まりました。上演が決まってたいそう忙しくなったセヴラックは挙げ句の果てに病気になって、休養のために帰郷します。この頃のセヴラックはサン＝フェリクスとパリを間を往復していました。

1909年というのはセヴラックにとって意味のある年でした。イサーク・アルベニスがこの年に亡くなっています。セヴラックはアルベニスに師事し、後にアシスタントをつとめてたいそう親しく付き合っていましたし、大きく啓発を受けていました。同じ年、バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）がパリで旗揚げをし、後にストラヴィンスキーの《火の鳥》（1910年）、《ペトルーシュカ》（1911年）、《春の祭典》（1913年）を次々と上演し、パリを大きく刺激します。《春の祭典》がパリで初演された年には、フォーレがセヴラックに遅れて《ペネロープ》を書いています。このようにいくつもの芸術的イベントが重なって進行していく、動きの激しい時代になりました。その中で、セヴラックは、自分の芸術家としての立場について動揺したり思考を深めたりしていきます。《風車の心》初演翌年の1910年、セヴラックはパリを離れ、セレに移住します。したがってセヴラックにとってもエポックメイキングな年だったわけです。

◆《風車の心》のあらすじ その1

マリーという女性（ソプラノ）がヒロインです。マリーは友達から衝撃的な話——かつての自分の恋人が風車小屋に現れた、という話を聞きます。この恋人ジャック（テノール）は、ずいぶん前にマリーに憧れて求婚し、貧乏でお金がないために町へ稼ぎに行きましたが、そのまま戻って来ませんでした。友達はその姿を見たというのですが、夜だからはっきりわからない、ともいうのです。マリーは、ジャックが自分を捨てて出て行ったと思ったので、すでに別の男と結婚していました。しかし彼が戻ってきた、というのはたいそう衝撃的なことだったので、見にいこうという気持ちになります。

時は9月の終わりで、葡萄の収穫祭が明日が最後。村中が盛り上がっていてあちこちからいろいろな音が聞こえ、音楽の準備をしているようです。その風車小屋に、まるで影の中から現れたようにジャックが登場します。ジャックは懐かしい村に帰ってきて、かつてマリーに憧れて、マリーを幸せにしようと思って、しかし自分は何にもお金がなかったから町に出て行ったのだ、という一種の名乗りの歌——テーマソングを歌い始めます。これが今日これからお聞き頂く《ジャックの唄》です。

このオペラは「歌のカatalog」と言われたくらい、歌い方のスタイルがいろいろ変わります。《ジャックの唄》は民謡調です。

ジャックとマリーのふたりは再会しますが、その話を風車小屋の中で年取った粉ひきの男が聞いていました。この粉ひき男には、それがどういうことになるかよくわかっています。

第2幕になって村人たちがすっかり寝静まっているところを見計らって粉ひき男は小さい声で「ジャック」と呼びます。そして、ジャックにマリーがすでに結婚していること、ジャックがこの村に戻ってくるとどういことが起こるか、を伝えます。そしてお前はもう戻ってくるべきではない、と言います。それを聞いてジャックはたいそう悩みます。風車からはいろいろな声が聞こえてきて、ジャックを責めたてたり考え込ませたりします。フクロウが鳴きます。前回の例会でボードレールの《梟》——フクロウは賢く森の中ですべての人間を見つめながら鳴く、という歌を聞いて頂きましたが、ここでもフクロウがジャックの行く末を教えます。そしてジャックは、村を出て行くこと、二度と戻ってこない出発を決心します。

（談）

◆歌劇《風車の心》の初演のキャスト一覧

LE CŒUR DU MOULIN



1^{re} REPRÉSENTATION SUR LE THÉÂTRE DE L'OPÉRA-COMIQUE

(PARIS, DÉCEMBRE 1909)

Direction de M. ALBERT CARRÉ



PERSONNAGES

Marie	Soprano	M ^{lles} B. LAMARE	Jacques	Ténor	MM. COULOMB
La Mère	Mezzo-Soprano	BROHLY	Le Vieux Meunier	Basse	VIEULLES
Louison	Soprano	G. JURAND	Pierre	Ténor	de POU MAYRAC
Le Hibou	Soprano	X...	Un Vendangeur	Baryton	VAURS

" LES SOUVENIRS D'ENFANCE "

La Fée du Blé	Soprano	M ^{lles} A. GANTERI
La Fée des Rondes	Mezzo-Soprano	ROBUR
Le Vieux Mendiant	Ténor	MM. DONVAL
Le Bonhomme Noël	Basse	PAYAN

Vendangeurs, danseurs, ménétriers, enfants.



Danse des Treilles et du Chevalet, réglée par M^{me} MARIQUITA

Avec la collaboration de M. ROUGIER.

Chef d'orchestre : M. HASSELMANS. — Régisseur général : M. CARBONNE.

Chef de chant : M. MASSON. — Chef des chœurs : M. GÉORIS.

Chef machiniste : M. E. RAMELET.

Décors de M. RONSIN.

Costumes dessinés par M. JAU et exécutés par M^{me} Louise SOLATGÈS et M. Henri MATHIEU.



Propriété de l'auteur : D. de Séverac.

*Pour traiter des représentations, de la location de la partition,
des parties de chœurs, de la mise en scène, etc.*

s'adresser à MM. ROUART, LEROLLE et Cie, 18, Boulevard de Strasbourg, à Paris.



◆歌劇《風車の心》の曲目一覧

INDEX



ACTE I

	PAGES
Introduction	1
Scène I. — Chœur des Vendangeurs. <i>Marie et Louison</i>	5
Scène II. — <i>Jacques et les Voix de la Nature</i> . (Chanson dans le style populaire ancien). Voix dans le Village. Voix dans le Puits. Voix dans le Vieux Moulin. Voix de la Nature	24
Scène III. — <i>Jacques et Marie</i>	48
Scène IV. — <i>Marie, Pierre, les Vendangeurs. Jacques, dissimulé derrière le puits</i>	75
Scène V. — Les mêmes et <i>Jacques</i>	85
Scène VI. — Les mêmes, le <i>Vieux Meunier</i> arrivant du Village	89
Scène VII. — Les mêmes, la <i>Mère de Jacques</i>	94

ACTE II

Prélude	105
Scène I. — <i>La Fête des Treilles</i>	110
Scène II. — <i>Marie, le Vieux Meunier</i>	133
Scène III. — <i>Jacques, le Meunier</i>	141
Scène IV. — Les mêmes, la <i>Mère</i> . Le Puits. Les Voix de la Nature	154
Scène V. — Les mêmes, le Hibou. Voix dans le Moulin	181
Scène VI. — <i>Jacques</i> . Les “Souvenirs d’Enfance” : Le Bonhomme Noël, la Fée des Rondes, le Mendiant, la Fée du Blé. La <i>Mère</i> . Voix venant du Village	187
Scène VII. — La <i>Mère</i> , puis <i>Marie</i>	198
Appendice : Danse du Chevalet.	203

Le coeur de moulin : piece lyrique en deux actes / musique de Deodat de Severac ; poeme de Maurice Magre ;
partition pour chant et piano reduite par l'auteur.

Paris : Edition Mutuelle ; New York : Breitkopf & Haertel, c1909

石田一郎のプロフィール

石田一郎

一九〇九(明治四二)一・二四一
一九九〇(平成二七)・十三

秋田生れ。一九二三(大正十二)年上京、田中規矩士、高折宮次にピアノを学び、作曲を宮原楨次、大沼哲に師事。一九二八(昭和三年)頃、山本周五郎、今井達夫らと親交を結ぶ。三二年より雑誌『音楽新潮』に寄稿、「賦」(山村暮鳥詩)などの作品を掲載するとともにレコード評を担当。三四年、荻原利次、落合朝彦とともに独立作曲家協会を結成、四回の作品発表会で、歌曲「沙羅の花」芥川龍之介詩、ピアノ組曲「遠退く町」、「オーケストラのための小組曲」、「ピアノ五重奏曲」などを発表。三六年、日本現代作曲家聯盟に入会、三七年、第三回作品発表演奏会で歌曲「お伽噺」(城左門詩)を、翌年、第五回作品発表演奏会で「フリユート、クラリネット、バスーンのための三重奏曲」を発表。四二年、音楽文化協会第二回室内楽作品発表会で「ピアノ四重奏曲」、四四年、東響定期公演で「五つの神話」初演。一九四六(昭和二一)年、清瀬保二、早坂文雄らとともに新作曲派協会を結成、四八年「チェロとピアノのためのファンタジー」、四九年「ヴァイオリン・ソナタ」、

五〇年「フルート・ソナタ」を発表するが、一九五〇(昭和二五)年退会、翌年荻原利次らと自由作曲家協会を結成。五二年「チェロ・ソナタ」、五三年「フルート、チェロとピアノのためのソナタ」、五五年「ヴァイオリン・ソナタ第一番」、五八年、室内楽曲「北国の春」などを発表した。一九五一(昭和二六)年から六四年までラジオ東京(のち東京放送)編成局に勤務。

主要作品 【管弦楽曲】「小組曲」「交響楽詩」「森の婚礼」(三三五?) 【交響詩】『祭』(三八) 【幻想曲】(of. orch. 四) 【五つの神話】(四) 【譚詩曲】(of. orch. 四三) 【吹奏楽曲】「行進曲」「栄光の兜」(三八) 【交響的序曲】「八尋白智鳥」(四一) 【室内楽曲】「ピアノ五重奏曲」(四〇) 【小組曲】(fl. ob. cl. hr. 四〇) 【ピアノ四重奏曲】(四二) 【フルート五重奏曲】(四四) 【ヴァイオリン・ソナタ第一



石田一郎

番(四九) 【フルート・ソナタ】(五〇) 【チェロ・ソナタ】(五二) 【フルート、チェロとピアノのためのソナタ】(五三) 【ヴァイオリン・ソナタ第二番】(五五) 【オーボエ、クラリネット、バスーン、弦楽四重奏とピアノの『北国の春』(五八) 発表) 【祭の笛】(五・六〇) 【弦楽四重奏のための組曲】(六〇) 【ピアノ四重奏曲第一番】(六三) 【クラヴサン四重奏曲】(六四) 【フルートとピアノのためのソナチネ】(六九) 【ギターのための三つの小品】(七一) 【横笛二章】(七二) 【ピアノ曲】組曲『遠退く町』(三三) 【黄昏の林檎畑】「遠い祭」(四三) 【山峡の村】(四四) 【北国】(六八―六九) 【声楽曲】『賦』(山村暮鳥詩 二九) 【田沢温泉】(田中冬二詩 三〇) 【心の落葉】(堀口大学詩 三三) 【沙羅の花】(芥川龍之介詩 三四) 【鳥羽絵】(城左門詩 三四) 【六月の蜜柑水】(北園克衛詩 三六) 【お伽噺】(城左門詩 三七) 発表表) 【菊畑】(大木惇夫詩 四六) 【燕の歌】(立原道造詩 四八) 【青い夜道】(田中冬二詩 四九) 【三つの歌】(堀口大学詩 五二) 【火の祭典】(手塚久子詩 五四) 男声合唱曲「点鐘鳴るところ」(丸山薫詩 六〇) 女声合唱曲「樺花戯書」(城左門詩 六一) 女声合唱曲「風のある風景」(市川祐三詩 六六)

『プロフィール 27 作曲家群像——新興作曲家聯盟の人々』(1999)、「石田一郎」の項より
(資料提供：近代音楽館)

連 載
セヴラックを伝えた日本語文献
その4
末永理恵子

先号と先々号では、1936（昭和11）年に『音楽新潮』に掲載されたランドルミーの論文が取り上げられましたが、同じ雑誌に現れたセヴラックに関する言及を、年代をさかのぼってご紹介します。今回は1933（昭和8）年の5月号（10巻5号）を見てみましょう。

この号には、4人の同人によるレコードの新譜評（藤木義輔、清瀬保二、石田一郎、前田鐵之助）でセヴラックのレコードが取り上げられ、主筆の柿沼太郎がコルトーによる解説やセヴラックの言葉を引用しながら書いた解説が掲載されています。この注目の新譜は、コロムビアから出たブランシュ・セルヴァ独奏による3枚のレコードでした（レコード番号は8099～8101）。《ラングドックにて》の第1曲〈祭の農家をめぐして〉（1904）、《セルダーニャ》の第4曲〈リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ引きたち〉（1911）、および〈ひなたで水浴びする女たち〉（1908）の録音です。字数の都合で、新譜評の方のみお目にかけますが、実に全員がこのレコードを絶賛しています。

* * *

(1) 藤木^{ぎすけ}義輔（評論家、1894～？）による評¹

コロムビア

◇セヴラックのピアノ三曲に先づ指を屈する。演奏者ブランシュ・セルワ嬢は作曲者の生前から親しい友であり特にセヴラックの研究者である。あの美しい「寺の墓地にて」の取められてゐるアルバム「ラングドックにて」の中の「祭のマスを目指して」では、急流のほとりとか清らかな泉とか、村へ行く途中の情景が眼に見るやうである。鐘や鈴の音を表はすに妙を得てゐる彼の手法は、急流とか泉とかの水の音に爽やかな光を帯びさせて、我々の心にしづきが掛つて来るかときへ思はせる。

「セルダーニャ」の中の一曲「リヴィアの美はしき基督の前なる驃馬曳達」こそ彼の最も得意とする鈴の音と鐘の音と美しさである。前の曲で祭のマス（部落）の静かに鐘の音に暮れて行く感じを一層深くして、此処では村民の素朴な深い信仰と温かな慰めを表す鐘の音、祈りをすませた後の清々しい軽やかな気持を表はす帰りの驃馬の鈴の音、一寸他の人には真似の出来ないセヴラック独自の境地である。「陽光を浴びる女達」は最も明るい健康な彼である。南国人としての彼が躍り上つてゐる。地中海の海の色、強烈な太陽、潮風になぶられる女の裸体、そんなものがスペインの活々としたリズムに描かれてゐる。

かうした彼の音楽を若し人がいふやうに「ドビュッシィと等しく印象派に属する」

といふならば、印象派といふ言葉は「朦朧」の同意語ではない。彼が絵画的である事は、それが聴覚を通してつひにすつきり視覚にまで及ぶ程音楽的であるといふ事に他ならない。然し彼の深い抒情性は非常にドビュッシイに近い事を私は認める。結局彼も優れた詩人である。

(2) 清瀬保二 (作曲家、1900～1981) による評²

○三つのピアノ曲 (セヴェラック) —セルヴァ。

南方詩人として、土の詩人としてセヴェラックを愛する。明るい南方の音画である。これも亦近代なのだ。私はかつて私の作品から土の臭ひがすると評されたが、自分ではよく分らない。然しセヴェラックの曲からはよく土の臭ひをかぐ事ができる。日本でジルマルセックスが初演した「春の墓場の一隅より」は愛惜おく能はないものであつた。また「大地の歌」(ピアノの為めの田園詩) 中の間奏曲なども。この三つの中「リヴィアのクリストに詣づる騾馬曳達」が一番すきだ。

彼の歌曲も魅力深いものである事を申添へておく。

この後に、「セヴェツラック [ママ] と共に近代音楽研究者に是非すゝめたい盤」として、クロワザによるデュパルクとプーランクの盤が紹介されています。

(3) 石田一郎 (作曲家、1909～1990) による評

石田一郎はほかの人より多くの字数をセヴラックに割いています。セヴラックとモーツァルトの〈フルートとハープのための協奏曲〉のみについて書いた彼の文章の中で、セヴラックは54行、モーツァルトは8行。圧倒的な配分です。

コロンビヤ

『三つのピアノ曲』セヴェラック

ブランシュ・セルヴァ

「村の祭りを指して」

「リヴィアのクリストに詣づる騾馬曳達」

「陽光を浴びる女達」

×

南フランス生れのデオダ・ドゥ・セヴェラックはロオラゲエのサン・フェリック・ドゥ・キャラマンに千八百七十三年七月二十日に生れた。

千八百九十七年にサン・ジャック街のスコラ・カントラムでワ ンサン・ダンデイとアルベリック・マニヤールに教育を受けたがフランキストに加はることなく、セヴェラックはアルベール・ルーセルと共に特異な天分によつて独自の道を歩いた人である。三つのピアノの為のアルバム「大地の歌」「ラングドック」「セルダーニア」から考察しても自然に懸想する印象主義と見ることが出来る。

セヴェラックの藝術は自然からのアンスピラシオンによつて喚起する叙景を豊富

な色彩と真昼の太陽の光のやうな輝かしさと明確なリズムとミディーの情諸 [ママ] を表現してゐる。彼のデリカな感受性が組立てる彼の音楽の世界は吾々に新しい傾向を準備したのである。セヴェラックは十年間の巴里生活後は南国の故郷に去つてその地の自然を爛々と歌ひながら千九百二十一年三月二十四日にスペインに近接したピレネーゾリアンタールのセレーに四十八歳にして生涯を終つた。

×

此等の三曲はそれぞれの変つた面白さがある。「陽光を浴びる女達」はアルフレド・コルトーに捧げられたものでバニユー・シュール・メールの思ひ出として書かれてゐる。「バニユー・シュール・メールはピレネーゾリアンタールのセレーの近くのバットルリ河口にある海岸の名である。」

地中海の明るい太陽の光を浴びてゐる海水浴の女達を描いてゐる。南フランスの輝かしい太陽の光りと紺碧の水の色と薔薇色の皮膚をした快活な女達が嬉々してゐる印象的な音画である。

「村の祭りを指して」は祭のある村に行く途中の風景と村の祭を描いてゐる。此の曲の中には三つの標題が示されてゐる「急流に添ふ道」「泉に佇み」「村の祭」セヴェラックは微笑みながら急流に添ふ道にせゝらぎを聞き、柔な森の緑を映して渾々と湧く泉のほとりに佇み、祭りのある村を指して歩み、そこではマスの明るい素朴な人達とたのしい祭りの気分に浸りながら夕暮の寺の鐘を聞く一日の楽しい歩みが語られてゐる。

マスは南フランスの農家を云ふのであるから村の祭と云ふよりもマスの祭と云ふべきであらう。

「リヴィアのクリストに詣づる驟馬曳達」

讚美歌を歌ひながら歩む信仰深い驟馬曳達と共に歩む驟馬、その首の鈴が鳴り亦遠くには寺の鐘が鳴つてゐる。

その驟馬曳達の慎み深い歩みとその心を、夕暮にも静に鳴り響く寺の鐘に送られながら帰へるその人達をセヴェラックは詩情豊に、絵画的に描いてゐる。

×

演奏者はセヴェラックの紹介者として有名なブランシュ・セルヴァ夫人である。セヴェラックのピアノ曲の演奏では第一人者であらう。亦夫人の著作による「デオダ・ドゥ・セヴェラック」は有名な著書である。セヴェラックの器楽曲のレコードはこれが最初であると思ふ。前には声楽曲の「私の可愛いお人形」と「オーバード」がクロアザ夫人によつて歌はれて出てゐる。

此の叙景的音詩人のピアノ曲を近代音楽愛好家に切に推奨したく思ふ。

(4) 前田鐵之助 (詩人、1896 ~ 1977) ³

詩人として、声楽曲のレコードを主に紹介している中で、セヴラックのこのピアノのレコードは特別に詳しく記しています。

兼ねて聴きたく思つて居たセヴエラックのピアノ曲が三つブランシュ・セルヴァに依つてコロムビアから出されたのは是も今日での嬉しいものだつた。此の南方の音詩のプレツスを私は如何に待ちこがれたらう。セヴエラックの歌曲の伴奏の美しさにひき付けられた私はそのピアノ曲の素晴らしい詩を予感して居たので此の南方的な作家の懐にすぐ入ることが出来た。南仏の田舎のカラーと燦めく太陽を感じる丈けでもいゝ。その単純な音色は丁度グリーグがノールウエーの自然から生え出たやうに温かい自然に包まれて光り輝いて居る。全くセヴエラックこそは南仏オルテーズの田園詩人フランシス・ジャムと同じやうにヂエオルヂックの詩人だ。此の二人の間には可成似通つた自然観が見出されると思ふ。私は此の晴れやかな健康美に溢れた自然への愛と真卒さを愛する。もつと沢山セヴエラックのものが出来て欲しい。

* * *

ほかの雑誌の評者は必ずしもここまで絶賛しているわけではありませんが⁴、「近代の」音楽に大きな関心を寄せる『音楽新潮』の同人たちは、かなりセヴラックに注目していたようです。

セルヴァの録音はCDに復刻されていますので(Malibrán CDRG-177)、この歴史的録音を聴きながら当時を想像してみるのも一興でしょう。

註

- 1 藤木がセヴラック以外に取り上げたレコードの曲目は以下の通り。
モーツァルト フルートとハーブのための協奏曲(モイーズ、ラスキース)
同《3つの田園舞曲》〈メヌエット〉(レオ・ブレッヒ指揮、BPO、LSO)
シャブリエ 《グヴァンドリーヌ》序曲(コッポラ指揮、バリ音楽院管)
アルベニス 〈マラゲーニャ〉〈セギディーリャ〉(コルトー)
デュパルク 〈旅への誘い〉、プーランク 《動物小話集》(クロワザ、プーランク)
- 2 清瀬が取り上げたセヴラック以外の曲目は以下の通り。
スメタナ 〈モルダウ〉(ブレッヒ指揮)
シャブリエ 《グヴァンドリーヌ》序曲(コッポラ指揮、バリ音楽院管)
バッハ 2つのヴァイオリンのための協奏曲(メニューイン、エネスコ)
アルベニス 〈マラゲーニャ〉〈セギディーリャ〉(コルトー)
デュパルク 〈旅への誘い〉、プーランク 《動物小話集》(クロワザ、プーランク)
- 3 前田が取り上げたセヴラック以外の曲目は以下の通り。
デュパルク 〈旅への誘い〉、プーランク 《動物小話集》(クロワザ、プーランク)
ラヴェル 《子供と魔法》より

ドニゼッティ 《ランメルモールのルチア》より
ラロ 《イスの王》より
シューベルト 〈夕映えの中で〉ほか（エリザベート・シューマン）
シャブリエ 《グヴァンドリーヌ》序曲（コッポラ指揮、パリ音楽院管）
シューベルト 交響曲第5番（ブレッヒ指揮）
スメタナ 〈モルダウ〉（同）

4 『月刊楽譜』22巻5号（1933.5）では深井史郎が次のように評しています。

三曲六面に吹込まれてゐる曲は非常に穏健なもので、郷土的な憂愁にみちてゐる。全体は非常にピアノステイックに書かれ、仏蘭西のアルベニス之感がある。惜しむべき事にはどうも冗長で変化に乏しい。われわれはたゞ美しい退屈を感じる [。] 色彩の華やかな、しかも尠大な風景画である [。]

（引用の際、旧漢字は新漢字に改め、踊り字の「くの字点」は仮名に開いた。）



セヴラックと私 西村 祐

ある夜、フルート仲間の石川さんから電話。「ねえ、セヴラックっていう人、知ってる？」

思えば、この頃からデオダの引力に取りこまれたのです。もう何年になるでしょう。

僕が最初にデオダ・ド・セヴラックという作曲家を知ったのは、館野先生のあの素敵な2枚組のアルバムによってでした。ジャケットの写真、ライナーノートの文章、作品のひとつひとつの姿と、その魅力を伝えてくれる演奏、そのすべてが絶妙のバランスをとって存在していました。

そのころ、自分自身何度目かの「館野ブーム」でした。それは、『シューベルト・後期ソナタブーム』から始まったことなのですが、いくつもの演奏を聴き直した中で、『セヴラック・アルバム』の10年前に録音された館野さんの演奏が一番しっくり来たのです。そのなかで展開される演奏の温かみと凄みに取り憑かれた聴き手にとって、たとえ未知の作曲家であっても、同じ音楽家の演奏する録音ならば、それを手に取ることは、とてもたやすいことでした。

聴き始めたたん、それまでの自分のなかにはなかった自然への憧れや、「光」というものに対する感覚が呼び覚まされるような気がしました。それまでは都会の深夜の、どことなく冷たい光や空気が好きでしたし、お日さまよりは凜とした月の光が好きでしたし、春や夏より冬が好きでした（これは今でもそうですけど）。けれど、セヴラックという作曲家を知ったあとは、そのまるで反対側にあるものにも目が向くようになったのです。

ピアノの響きから出てくる音楽ならではの色彩の豊かさ、音の拡がり、決して大言壮語することはないのに惹きつけられるその和声とメロディ。そこにある深みと、しかし裏側にあるそこはかとない哀しみと淋しさもすべて含んだその作品たちは、僕がフルートという楽器を考え直す良いきっかけとなったのです。

フルートだって金属製だったりするから見た目はちょっと冷たいけれど、もっと温かい音楽ができるはずだし、実際そんな音楽をやったら、自分だって楽かもしれない。そんなことを考えているうちに、あの電話がかかってきたのでした。

それ以降、「セヴラックってご存知ですか？」と尋ねることが増えました。すると、思いがけずたくさんの人が「知ってますよ。いいですよねえ」とお答えになります。とくに驚いたのは、さまざまな作品をフルート四重奏に編曲しているある大先輩が

いらっしやるので訊いてみたら、「よく知ってるよ。昔《公園でのロンド》編曲した。僕の四重奏曲集に入ってるよ」とおっしゃったこと。それはそれは！

そうこうしているうちに、ここにも入れていただきました。そうしたらそこに大学時代の恩師がいらしたし、そのあともいろいろな繋がりが拡がりました。その昔、セヴラック自身の回りにさまざまな人の輪ができたように、また、時代を超えたセヴラックの引力に驚くことしきりです。

おまけ。

この数年、関東在住のアマチュアフルート吹きと関わることが多いのですが、そこで以前から知っているある音楽ホール設計者と、事務局でご尽力下さっている亀田さんが高校時代の同級生だった。

その設計者もアマチュアチームで参加している「日本フルートフェスティバル in 東京」に同じくアマチュアで参加する人のなかに、亀田さんと同じ会社の人がある。なんて不思議なこと。



第12回例会の報告

鎌田和夫

六月の空を仰ぎ見たら、そのまま梅雨が明けてしまったような心地よい太陽の光りに包まれ、時が爽やかに流れていました。その日は石川絵津子さん編曲によるフルート六重奏曲の節目に相応しい日和ではなかったかと。セヴラック《休暇の日々から》第一集〈ロマンティックなワルツ〉は長閑で楽しい曲のはずなのに、いつになくフルートは物哀しく、どこか切なく響き、幼子が淋しげに泣き濡れていました。名残惜しい人を見送るような思いに囚われ、涙を誘われながらも重ったるい空気は微塵もなく、軽やかな風が通り過ぎてゆくのでした。見守ってくれるセヴラックの温かな微笑がみんなの顔に反映され、石川さんらを称えつつ、新たな挑戦に期待する思いが芽生えはじめていたのです。

この夏、久しぶりに女房の実家である能代へ列車を乗り継ぎ行ったのですが、秋田から能代へ向かう最初の駅が土崎です。どういうわけか終戦の前日の深夜、B 29 による不可解な空襲を受け、大被害を被った油田の地、悲劇の土崎は鄙びた暗い港町という印象を抱いたまま、気懸かりでありながら幾度となく通り過ぎていた駅です。しかし、今回は光明がありました。ここが石田一郎の生誕の地であると教えられていたので、どこか親しみある場所が変わっていたのです。その時、組曲《北国》より〈夜の船着場〉〈吹雪の夜〉を暗譜で力強く弾いて下さった平原さんのピアノの響きが思い出されました。～激しく地吹雪の舞い上がり／容赦なく顔に突き刺す雪片の鋭く／冷たさに耐え忍ぶ力の湧き上がり／囲炉裏を囲む団欒の仄々と～。そんな雪国の人々の懐かしい姿が鮮やかに浮かび上がり、すっかり暑さを忘れていました。やはり音楽には人の心を癒す力がある、と改めて思ったものです。

サン＝フェリクス・ロラゲの田園にある想像上の風車ってどんなものかしらんと耳傾ければ、清々しく朗らかな、緑の連なる豊かな丘の広がり、水車が高貴な愛すべき美しい娘の姿に変身し、淑やかに浮かび上がっているではありませんか。清らかに流れる川から運ばれた水が噴水のように高く舞い上がり、大地を潤しているのです。セヴラック《朝の歌》《奉げもの》、歌劇《風車の心》第一幕より〈民謡風の唄〉の大らかに呼吸する風景を、末吉先生のお話とピアノ、鎌田さんの唄で緩やかに紡ぎ出し、静かな午後のひとときを、安らかな思いに満たしてくれたのです。

指使いも厄介、ペダルも難しく、貧しい土地に蕎麦の実を蒔くみたいで、ピアニストにとっては居心地悪い曲であります、と舘野先生特有の笑いを誘う話に、林光《花の図鑑・前奏曲集》の演奏が待ち遠しく思えたものです。そうして耳を澄ませたら、蕎麦の花の白く美しく、囁んだ蕎麦の実の香ばしさが口いっぱい広がったように想われ、それぞれの花に酔いしれていくのでした。そこには会員の皆さんの優しい笑顔が開花していたのです。

NEWS

●協会のメール・アドレスを変更しました。

膨大なスパム・メールのため、メール・アドレスを変更しました。
新しいアドレスは severac.japon@gmail.com です。アドレス帳などの変更をお願いします。

●歌劇《風車の心》のCD発売（仏）

フランスのティンパニ Timpani というレーベルが、歌劇《風車の心》を2009年9月に収録し、2010年4月に発売するようです。ティンパニは、フランスの近現代のレパートリーを得意とするレーベルで、ビリー・エイデイ演奏によるセヴラック《セルダーニャ》等を発売しています。下記のホームページで、《風車の心》の収録の様子と、インタビュー（仏語）を見ることができます。

http://www.classiquenews.com/voir/lire_article.aspx?article=3323&identifiant=200911199FA32R6XAC0YYBD3XF7ICLPBA

演奏者や配役は下記の通り。

- ・指揮 Jean-Yves Ossonce ・演奏 l'Orchestre Symphonique Region Tours
- ・配役 Jacques ; Jean-Sebastien Bou , Marie ; Sophie Marin-Degor
La Mére ; Mearie-Therese Keller, Le Vieux Meunier ; Jean-Yves Pruvot

編集後記

◆前回例会より始まった歌劇《風車の心》連続演奏。今号では例会における末吉保雄先生の話を起こしてまとめました。折よくフランスからCD発売のお知らせが！（山根さん、情報をありがとうございました）。初演百年を祝う、うれしいニュースでした。次号で紹介できるかもしれません。

セヴラック通信 第7号 2009 後期 日本セヴラック協会 会報

2009年12月13日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

編集：亀田正俊、窪田葉子、末永理恵子、山根京子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン



日本セヴラック協会
Société Déodat de Séverac - Japon